



教師教育の危機に瀕し何をなすべきか

福井大学大学院教職開発専攻長 松木 健一

中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上策について」(2012. 8.28)1)では、「学び続ける教員像」を確立すべく、教員免許制度の改革の方向性を示すとともに、当面の改善方策として、教育委員会・学校と大学の連携・協働による高度化を提起した。その背景には次のような状況認識がある。

まず、グローバル化する世界の中で着実に知識基盤社会が進行し、子どもに培うべき資質能力が変化してきているが、それに対応できる教師教育の高度化・専門職化が実現できていない。むしろ逆に、大学進学率の上昇や入学試験の易化による大学の大衆化に対し、課程認定大学の多くは、大学運営とも絡んで安易に教員免許状を出し、教員資格の社会的ステータスを下げることがを幫助してしまった。この原因の一つは、大学で教員養成に携わる者の多くが、戦前の師範学校のトラウマを抱え、教師の専門性を追求研究することに躊躇していたからであろう。「教師は優れた教養人であるべきである」といった理想は、一芸に秀でれば(教科の専門を深く修めれば)良い教師になれるという論理にすり替わり、結局のところ、教師としての専門性を培うための実践研究が欠落したまま半世紀を過ごすことになってしまった。

一方で、資質能力の具わらない教員の出現ないしはその類の論調は、大学における教員養成批判と共に、教師の仕事について、徹底した実践的技能訓練によって鍛え直そうとする風潮を生み出した。日本における教師塾の出現は、大学における教員養成批判顕在化である。しかし、教師の専門性への追求がなければ、「一芸に秀でれば…」論も、実践的技能訓練重視論も、共に教師の仕事に「イージーワーク」に貶めてしまうことになること(佐藤学2011^注)に変わりない。いま、教師の専門性が何であるのか、実践研究の中で解き明かしていく

ことが急務である。

手掛かりはある。教師の仕事が省察的实践によって支えられていること、学びの成立にとって協働探究が教師にも子どもにも欠かせないこと、語り合い傾聴しあうコミュニティづくりが重要であること、学び続ける教師になるためには1大学1教育委員会を越えた大学間ネットワークが意味を持つこと等。これらが教師の専門性構築にとって欠かせないことを、福井大学の教職大学院の実践は明らかにしている。

戦後の教員養成は、「大学での教員養成」「免許主義」「開放制」の原則を基軸にしてきた。これらの原則は、民主主義の教育を維持する機能を持っていた。しかし、次第に金属疲労を引き起こしつつある。学び続ける教師を支えようとする、教師教育を大学4年間に封じ込めるのではなく、大学と教育委員会の連携のもとに、教師の生涯にわたる職能成長を支える仕組みが必要である。大学での教員養成の殻を破り、打って出なければならない。また、教員免許状というライセンス(license)だけでなく、学びの

内容

- 教師教育の危機に瀕し何をなすべきか (1)
- 合同カンファレンスに参加して (2)
- 院生紹介 (5) 書評 (9)
- 第一回運営協議会が開催されました (10)
- フィリピンよりお2人の研究者との研究交流 (11)
- 福井大学教育地域科学部附属中学校
研究集会に参加して (14)
- 富山市立堀川小学校
教育研究実践発表会に参加して (16)
- ラウンドテーブル案内 (17)
- 学生募集の案内 (20)

継続性を保証するサーティフィケート(Certification)も検討しなければならないだろう。さらに、大学間のネットワークを専門職基準を共有する専門職の協会(Professional association)へ発展させ、開放制に代わる自律的な組織を構築しなければならないのではないか。戦後の教員養成の原則がアンシャン・レジーム(Ancien régime)となる日も決して遠くないように思われる。

風雲急を告げている。2012年12月の政権交代後、大学の教員養成に対する改革要請はさらに一層強まる傾向にある。政府の教育再生実行会議の第3次提言(2013.5.28)では、教員養成の量的整備から質的充実への転換を図る観点から、教員養成系学部における実務家教員の採用、実践型カリキュラムへの転換、組織編成の抜本的見直し、学校現場でのボランティア活動の推進等が提起された。加えて、文科省は「大学改革実行プラン」(2012.6.5)を実施する

ための「ミッションの再定義」を各大学に求めており、教員養成系学部・大学に対しては、第3次提言の具体化を迫っている。また、しばらく沈黙していた「教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議」が結論をまとめると、修士課程の抜本的な見直しと教職大学院への移行も加速化されるのではないかと。

いずれにしても、この変動の時期に教師教育の方向性を見誤ってはならない。大学の生き残り次元から離れ、日本の教育改革・教師教育改革に何をなすべきかを論議していきたいものである。6月29日には福井ラウンドテーブルが開かれる。活発な論議を期待したい。

(注) 佐藤学 2011 「教師教育の国際動向＝専門職化と高度化をめぐる」日本教師教育学会年報第20号 (ISSN 1343-7186) 47-54

May 合同カンファレンスに参加して

教職専門性開発コース2年 長谷川 恵亮

今回のカンファレンスは「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマでした。

午前のセッションでは正直、このテーマで何を話せばよいのかよく分かりませんでした。私のインターン先の丸岡南中学校について、今年度1カ月を過ぎて私が感じたことを話させていただきました。多くの教職員が入れ替わり、新入生も加わって新しいスタートを切った丸岡南中学校ですが、この1カ月は何だか落ち着かないソワソワした雰囲気だったように感じます。このような時こそ学校の理念に立ち返り、教科センター方式やスクエア制、黙働清掃などの意味を問い直し、学校全体で共有する必要があるのではないかと思います。と、このようなことを話している中で、意外と学校全体のことを見ていた自分に気がきました。去年のこの時期は自分のことで精一杯で、学校全体を見ている余裕はありませんでした。昨年度に比べれば私も少しは成長したということでしょうか？

今回同じテーブルになった佐賀県から来られた丸岡南中学校の北原先生からは、佐賀県の学校の取り組みについての話を聞くことができました。また、野球の指導者でもあるということで佐賀県の中学野球事情についても伺うことができました。普段だとなかなか接点を持ちづらい先生方とも話す機会ができるという合同カンファレンスの魅力を改めて感じました。

午後は、専門教科の授業づくりに関する実践記録を読んだ後、クロスセッションが行われました。私のグルー

プでは先月に引き続き、「社会科では何を教えるのか」「社会科の授業はいかにあるべきか」というテーマになりました。このテーマについては、最近木曜カンファレンスでもストレートの院生同士で話し合っているのですが、これがなかなか難しい。幾度かの授業実践を行い、実践記録も読んできてはいますが、私は未だこの問いに対するはっきりとした答えを持ち合わせていません。この日も松木先生から鋭い質問を受け、しどろもどろになってしまいました。社会科の専門性に関しては残念ながら昨年度から成長できていません。もっともっと勉強して実践を積み重ね、このテーマを追究していかないといけないと感じました。今回の合同カンファレンスは、学校と自分自身を振り返ることができ、新たな出会いもあり、また、自分の未熟さを再確認できた充実した時間となりました。この経験を生かし、さらに精進していきたいと思います。



スクールリーダー養成コース2年／藤島中学校 渡辺 裕幸

予備日程での参加ということで、院生11名と大学の先生方3名の計14名でのカンファレンスとなった。

教職大学院での学びにおける意識が、今年度自分の中で大きく変わった。昨年度は、2年生の先輩の先生方からいろいろ教えていただきながら学びを進めていった。また、その中で、ストレートマスターの立場の若い学生の方々に自分の経験をもとにいろいろと助言していくことも行っていった。大学院での学びの中で「ミドルリーダー」的な立場だったように思う。それが、今年度、先輩の先生方が抜けられ、自分達リーダー養成2年生が「リーダー」としてこの学びの中心となる必要があると感じている。リーダー養成1年生の先生方に対しては、抱えている多くの不安を少しでも払拭できるような声かけや心配りをしていこうと心がけているし、ストレートマスターの学生の方々には昨年度以上に良いアドバイスをすることができたかと考えている。そうした、昨年度とは違った意識で今回の合同カンファレンスに臨んだ。

1日の流れとしては、①「実践報告を聞く」②「大学から説明を受ける」③「クロスセッション1（現任校での実践について）」④「クロスセッション2（授業実践記録を読んで）」で進められた。

①リーダー養成2年生の先生による「教師の協働」における実践報告

成功例だけでなく、思うようにいかなかった事例までも提示していただいた。何事もはじめから物事が順調に進むとは限らない。いろいろな紆余曲折があっても成功へつながるのであり、思うようにいかなかったことをどのように改善して成功へと導いていったかを示していただき、本当にありがたかった。また、この実践報告で特に印象に残ったことが「組織の前に人ありき」「初めに子どもありきの姿勢」である。私も、「素晴らしい組織論」の前に職員室の先生方一人ひとりを大切にすることを忘れてはならないと思っているし、子どもたち一人ひとりを大切に、子どもたちを笑顔にするために教育活動を行っているのだという姿勢を忘れてはならないと思っているからだ。

②教職大学院での「学びの『意義』」について

大学の木村先生から、この教職大学院での学び（「実践を語る」「実践記録を書く」「実践記録を読む」）の意義についての説明を受けた。2年生の私にとってはこれまでも何度か聞いた内容であったが、改めて納得することが多くあり、自分の中でこの「意義」について再確認することができ、有意義な時間となった。1年生の先生方にとっては、この「学びの『意義』」の説明は貴重なものだったはずである。

③クロスセッション1（現任校での実践について）

このクロスセッション1は、大学の先生、ストレート院生2名（2年&1年）、リーダー養成2名（2年&1年）の計5名で行った。自分は昨年度、このクロスセッ

ションにより、学校生活における苦しい状況から救われた。日々のつらい状況や悩みを語る（吐露する）ことでメンバーから助言をもらい、また、今後の取り組みについての新しい視点を得ることができたからだ。「学校でまた頑張ろう」というエネルギーをこのクロスセッションでもらっていた。今回、ストレートの院生の実践報告に対しては、自分の経験をもとにしたアドバイスを語るとともに、激励の言葉を添えた。リーダー1年の先生の実践報告に対しては、自分の昨年度までの状況と似ている所が多かったため、苦しい状況を脱するため現任校で行っていた昨年度の実践について紹介した。悩みに共感するとともに、激励した。

④クロスセッション2（授業実践記録を読んで）

このクロスセッション2（授業実践記録を読んで）は、今年度からの新しい取り組みである。授業改革の必要性を強く感じる。クロスセッション1とメンバーを変えて、大学の先生、ストレート院生2名（2年&1年）、リーダー養成1名（私）の計4名で行った。

まず、ストレート1年の報告。すかさず大学の先生からの質問が飛ぶ。報告者はうまく答えられない。リーダー2年の私の助言をもとに、大学の先生から指導が行われた。

次に、ストレート2年の報告。やはりここでも、大学の先生からの質問が出た。2年生ともなるとインターンの経験がものをいい、うまく答えられた。

この2人の院生の「報告」そして「質疑応答」は、「授業力を『鍛える』」そのものだと感じた。この「クロスセッション2（授業実践記録を読んで）」を繰り返して行くことで、院生の「授業実践記録を『読む力』」が確実に向上すると感じる。どんなに素晴らしい授業実践記録を読んだとしても、それを「読む力」（理解する力）がなければ意味がない。また、その「『読む力』の向上」も、大学教授から行われるワンウェイの講義形式では身につかない。この「クロスセッション2」のように、経験年数の違う者どうしが「語り合う」ことを通じて身につけていくべきものであると考える。そうした意味で、この「クロスセッション2（授業実践記録を読んで）」の意義は大きいと思う。

今回の合同カンファレンスに参加して、この「教職大学院での学び」そのものが、「学校現場で『若手教師育成』をどのように進めていけば良いか」の学びであるように感じた。「授業実践」および「生徒指導」や「校務遂行」など、現場では若い先生にいろいろなことを教え、伝えていかなければならない。「授業」と同じで、一方的に「教え込む」のではなく、ともに語り合い学び合うという「協働」の中に、真の「若手教師育成」があるのではないだろうか。

スクールリーダー養成コース1年／福井県立敦賀工業高等学校 谷 康博

1学期中間考査を終え一息ついた頃、5月の合同カンファレンスに参加した。4月のときとは少し違う、緊張感を残しつつも和やかな雰囲気の中で行われた。

オリエンテーションでは「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」—その意味と実践—として、まず中藤小学校の高間恵美先生より「授業」における協働研究の現状とその必要性などについての実践報告があった。中藤小学校では特別活動や生徒指導等では協働が進んでいるものの、授業については教員個人の指導方法を尊重するとの観点から協働が進んでいないこと、どの学級においても同じ質の授業を提供するためには協働が必要であり、複数の教員で子どもを見ていくという意識を高めながら複数の教員で一つの単元をつくっていくという実践の報告内容であった。私の勤務校である工業高校は1学年4学科4クラスであるため3年間クラス替えが無く、担任も持ち上がりが原則となっているので学年内の連携は密であるが「学級王国」が色濃く存在している。また、学年主任が担任を兼務していることから学年経営よりも学級経営に重点が置かれやすい状況にもある。学年間の連絡や連携を学校全体として今一度見直してみると、学校活動のいろいろな面において教職員の協働による活動の展開をさらに進めていく必要があるのではないかと考えるようになった。次に、松木健一教授より、「授業を協働で見取ることの意味を考える」と題しての講義があった。これまでの知識習得の授業から脱皮し、知識基盤社会での学習スタイル自体について考えることの重要性、そして、子どもの思考のプロセスを意識した「思考のプロセスが生まれる授業を行うことの大切さ」についてのお話しであった。この講義内容は自分が授業で実践を通して試みていることに合致する内容も多く、不安がいったいそのまま実践を重ねてきた自分にとっては大きな励みとなった。これからは自信をもって試行と省察を繰り返しながら、授業における「学びの質」を高めていければと考えている。

それから、小グループに分かれ、「それぞれの学校で動き始めた状況についてグループで語り合い、捉え直し展望をひらく」としてセッションを行った。小規模校から大規模校までの小学校や中学校における教育現場の様子を直接聞き知ることができ、「学びの基本とは何か」を自分なりにゆっくりしっかりと考え噛み締めることができた。また、勤務校において現在も行われている授業研修の

取組が、とても貴重で重要な活動であることを再認識できた。と同時に、身近で普通で当たり前のこととされていることの価値を、私自身しっかりと認識できてしっかりと共有しているのかという疑問を抱くことへの契機となった。まずは自分の足元をしっかりと固めておく必要があると感じた。

その後、専門教科・領域の授業づくりとカリキュラムマネジメントに関する実践記録を読み、専門教科による小グループを再編し、「読んだ実践記録について、学習者の成長・コミュニケーションの発展と形成過程、それらを支える教師の実践コミュニティのあり方を探る」としてクロスセッションを行った。自分自身工業高校の工業科教員でありながら中学校における技術科の学習内容をほとんど知らない。ここでは、実技系を専門科目とする先生方から小学校や中学校の実技教育の環境と現状を知ることができ、「学びの繋がり・継続性」を意識し、自分の専門教科に対する考えと方向性を探ることができた。

・・・合同カンファレンスを終えるといつも自分自身驚いていることがある。それは、自分のことを話し振り返ることによって考えが縦に深化し、人の話を聞き知ることによって考えが横に拡大し、自分の視野や考えがどんどん広く深く大きくなっていくのを実感できることである。裾野が広がることでこれからの方向性も広がり可能性も大きくなっていく。そこで次に必要となってくるのは、真の姿を見極めることができる観察力、的確な取捨選択ができる判断力、継続して実施できる実行力、そして活動の輪を広げていける協働力といった「力」なのではないかと思う。新年度の学校活動が本格的に始めている今こそ、大学院で見る・知ること・考えることを現場において展開し実践し、学校に良い芽をひとつでも根付かせ残せることができれば・・・と思っている。



教職専門性開発コース1年／美浜中学校 池田 郁

今回の合同カンファレンスは、私にとって2回目のカンファレンスで、4月に比べると力みすぎではなかった

たものの、スクールリーダーの先生方と話すとなるとまだまだ緊張してしまいました。最初のグループの席につ

いてからもドキドキは収まりませんでした。そんな中で始まったカンファレンスではありますが、今回もたくさん考え、学ぶことができました。はじめのオリエンテーションでは、中藤小学校の高間先生がお話をしてくださいました。協働研究の必要性について、先生同士の力量・経験・個性の違いによる差をなくし、どの学級においても同じ質の授業を提供するための取り組みを教えてくださいました。これは経験も少ない、若手の先生方にとって、とてもプラスになるだろうと考えながら聞かせてもらいました。小学校は担任と生徒との関係が強く、他の先生方とは関わりが少なくていいです。しかし、子どもたちは先生を選べません。先生の力量や経験の違いから子どもたちの学習において差が生じてしまうかもしれません。しかし先生それぞれの違いを活かし、様々な先生方と協働し、一つの授業を創りあげていくとすれば、それは子どもにとっても教師にとっても一番良いことではないかと思いました。さらに、今回のカンファレンスでは、大きな収穫がありました。私は、インターンで美浜中学校にお世話になって二ヶ月経ち、インターン生としての生徒との関わりに悩んでいました。注意するにもあまり伝わらず、普段の関わり方もこのままでいいのかわからなかったのです。しかし、今回の話し合いですと力が抜けたように思います。しんぼう強く、時間をかけて生徒と接し、その中で筋さえしっかり通していれば、時間が解決くれると教えていただきました。私は、自分の立ち位置がわからず、焦っていたことに気づきました。また無理に

大きく背伸びをしようとしていることに気づきました。「甘えてくる子を受け止めてあげることも、あなたの役目ですよ。」とスクールリーダーの先生に言われた時、私は自分だからできること、インターン生だからできることがたくさんあるのかもしれない、私は私らしく生徒と関わっていこう、と考えを改めることができました。しかし、「指導を躊躇することで本当に何かを伝えたい時に何も伝わらなくなるのです。相手によって言うことを変えると周りの子はしっかりみています。そこだけは忘れてはいけません。」とこのようなアドバイスも頂きました。その通りだと思います。『和して同じず』この言葉は松田先生が教えてくださいました。この言葉に私が今回学んだことが全て詰まっているような気がします。私は私らしさを捨てずに、しかし、馴れ合いで終わってしまわないよう、教師を目指す者としてできることを精一杯していきたいと感じました。



院 生 紹 介



加藤 勝代 かとう かつよ

今年度よりスクールリーダー養成コースに入学した加藤勝代です。中学校9年、小学校6年の勤務を経て、現在福井県教育庁嶺南教育事務所研修課に所属して3年目になります。情熱と体力のみでがむしゃらに突き進んできた教員生活でしたので、事務所の業務は不安で一杯でした。しかし、上司や同僚の温かい励ましや見守り、的確な御指導をいただき、充実した日々を過ごすことができました。研修課は、講座の企画と運営、校内研修支援、教育課題解決に向けた調査・研究、教育図書の利用促進等を通して、忙しい学校現場や一人一人の先生方を側面から応援する課であると考えています。学校は何を求めている

か、研修課として何が出来るかを考え、業務につなげることが今の私の課題です。先輩の方々が積み上げてこられた研修課の役割を果しつつ自分なりにできることを考え、研修課の歴史を紡いでいきたいと思っています。昨年までの2年間は、学習指導に関わる業務を主に担当しました。特に1年目は小学校の新学習指導要領全面実施の年でしたので、学習指導要領改訂のねらいを理解することから始まりました。中でも、知識及び技能の習得と活用、言語活動の充実、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的な学習態度の育成は、日々の授業に直結する大きな柱です。これらのねらいをどう捉え、教員として学校として何をどのように取り組んでいけばよいのかを学校現場の先生方と一緒に考え続けています。講座では、ねらいに迫る効果的な具体策を求められることも多いですが、

これという決定打があるのではなく様々な迫り方があるというのが現在の私の答えです。ただ、このときに大切にしなければならないことが2つあると思います。1点目は子ども自身にとって学びがいのある授業づくりによること、2点目はそのような授業づくりを一教師だけでなく学校をはじめとする様々なコミュニティが支え、関わり、実践していくことです。しかし当たり前のことですが、目指すべき教育の方向性をつかむことが、即、明日の

授業展開の工夫につながるものではありません。そのため、「今わたしのすべきことは何か」「今わたしにできることは何か」を自問しながら日々進んでいきたいと思っています。そして教職大学院での学びを通して、子ども主体の学びを導く授業づくりとそれを支えるコミュニティづくりに迫る具体策を講じていきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



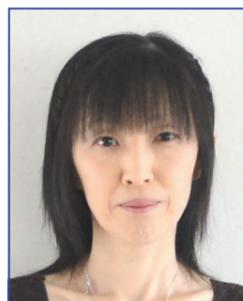
清常 徹 きよつね とおる

この原稿を書いている今日、本校で「教科を越えた小グループによる授業公開」が始まりました。これは、研究主題である「学びで『つながる』授業づくり」を追求していくための方法の一つです。中学校の教科間の壁を越えたい、多忙な中学校現場で全員授業公開を確実に実施したいという願いを具現化しようとしたものです。授業公開後の事後協議では、非常に活発な意見のやりとりがなされ、今後の研究の前進に大きな期待を抱いているところです。

今年度、私は学校長から研究副主任という立場を与えられました。研究の柱に関する部分は研究主任が、具体的な研修内容については私が担うことになりました。教職大学院に入学してまもなく、先輩院生の長期実践報告を読む機会がありました。本校でどんな研修を進めていけばよいのか悩んでいた絶好のタイミングで読んだその実践報告には、教科間の壁を越え、実りある授業公開を実現していった先輩院生の足跡が記されていました。私は、早速その実践報告の中にあつたたくさんのアイデアを持ち帰り、研究主任のアドバイスを受けながら、本校に合った研修の形を作りました。この実践報告に出会うことにより、見通しを持って研修をスタートすることができました。教職大学院で学ぶ機会を与えられたことは、私にとって大変幸運なことだったと思っています。

教職大学院の合同カンファレンスの中で、クロス・セッションが行われます。4～5名で互いの現状や問題点を伝え合い検討する場です。毎回メンバーがローテーションされ、さまざまな地域や立場の先生方と交流することができます。もちろん他県の先生方とお話しをさせていただく機会もたくさんあります。先日、これまでの実践や動き始めた学校の取り組みを報告させていただいたときに、同じグループになった先生方よりいろいろな角度からの質問を受けました。自分が何を大切にしたいのか、どこを目指しているのか、ぼんやりとしか抱いていなかったことを言葉として形にしなければならず、答えようと必死になる中で自分の頭の中が整理されていくという経験をしました。さまざまな視点をお持ちの先生方と交流することのすばらしさを感じました。

私はこれまで、一学級担任、一言語科教師として、自分のことだけを考えて教育実践を進めてきました。しかし、スクールリーダー養成コースへの入学ということ、研究副主任という学校全体のことを考える立場を与えられたことで、自分が学校改革の中心の一人となって進んでいかなければならないという自覚が芽生え始めました。気づけば今年度、学級担任集団の最年長になっていたのも偶然ではないような気がします。これから2年間、教職大学院で学んだことを本校の教職員とシェアし、同じ方向を向き、子どもたちの豊かな成長を実現するよりよい学校づくりを進めていきたいと考えています。



源甲斐 恵美 げんかい めぐみ

こんにちは。今年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました福井県立福井特別支援学校の源甲斐恵美です。私は千葉大学教育学部養護学校教員養成課程の出身で、地元の福井大学とはこれまで縁がなく、このような

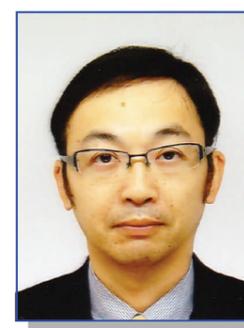
形で教職大学院で学べることを大変うれしく思っています。私は大学を卒業してから23年間、特別支援学校に勤務してきました。18年間知的障害の特別支援学校に、そして現在は肢体不自由の特別支援学校に勤務して5年目となります。お恥ずかしい話ですが、管理職から教職大学院を勧められるまでは、自分の人生の選択肢の中に「大学院に行き、教員として学びを深める」という考えは全くあ

りませんでした。また教職大学院設置の目的や特色について何も知らず、昨年度の12月に初めて理解したというのが正直な話です。しかし、このことがきっかけで、これまでの自分の教員生活を振り返ったり、今後の自分について考えたりするようになり「自分を変えたい」「学びたい」という気持ちが高まってきました。

昨年度、本校では小学部低学年の教員数名でグループを組み、福井県の教員指導力向上奨励事業の研究助成を受けて「肢体不自由児の認知特性に応じた指導」についての実践研究に取り組みました。この研究では、複数の教師で実践－記録－振り返り－話し合い－実践のサイクルで教師の気付きや視点の変化を教師間で共有しながら授業づくりを展開しました。このサイクルがよりよい実践につながる

ことを実感し、今後もこのような方法でさらなる研究を進めていきたいと思っています。またこのような方法による実践研究を学校全体に浸透させ、校内全体の教師の力量を高めることにつなげていきたいと考えています。

本校は子供たちの障害の種類や程度が様々であることから、それぞれの教師の研究テーマも多岐にわたり、一つのテーマを基に全員で考えていくことは難しい現状にあります。校内研究体制を整え、教師同士が学び合う雰囲気を作りながら、よりよい校内研究組織の構築に努めていきます。教職大学院で大学院や他校種の先生方の話を多く聞けることが私の財産になっています。ここでの学びを、より多く学校に還元できるように努力していきたいです。



片桐 哲也

かたぎり てつや

こんにちは。今年度、教職開発専攻スクールリーダー養成コースに入学した片桐哲也と申します。専門教科は中国語と国語です。中学校新採用、中国上海での日本語教師

を経て、現任校の福井県立足羽高等学校で20数年間、生徒と向き合う時間を大切にしてきました。これから2年間、どうぞよろしく願いいたします。

さて、これまで現場一筋でやってきた私がここで学ぼうと思った最初のきっかけは、昨年6月に行われたラウンドテーブルです。ラウンドテーブル初日には、「高校改革」というテーマで、易寿也先生より大阪府立松原高等学校での素晴らしい取り組みを学ぶことができました。その時、自分の未熟さを改めて痛感するとともに、自己変革を怠ってきたことを深く反省しました。これまで、自分の目の前のことだけに一所懸命に取り組んでいればよかったのが、教師生活も25年目になり、教師間の「協働」という視点で、どのように取り組んでいったらいいのか、悩んでいたところだったのです。

そこで、易先生が語られた「求められる力」は自分

にとって、これから目指すべきものであると気づかされました。それは、人権感覚に富み、みんなで生きること、をコーディネートできる力、オープンな語り合い、聴き合いのできる公共的空間をつくっていきける力、リアリティー（現実）に基づいた指導方法を創り出す力です。今後、これらの力を自分自身がいかにか育んでいけるかが、自分への挑戦であると思っています。

もう一つのきっかけは、同じ職場に20数年間ずっと居続けていると、ある意味で現実に埋没し、自分自身が硬直した発想や考え方に陥っているのではないかという不安に駆られるようになったことです。その不安を解消すべく、ここでは、校種、年代を超えた語り合いの中で、自己を省察し、一つの職場に長くいる人間だからこそできるものがあると信じて、教職大学院のさまざまな「学び」に繋げていけたらと思っています。

現在、足羽高等学校は、45分7限授業や学校設定科目（特に、「学び直し」）等を導入し、変革の一年目に入っています。まだまだ改善の余地のある取り組みなので、一歩でも前に進むべく、皆で努力していきたいです。これまでの足羽の教育に情熱を傾けてきた教師たちの経験「知」を踏襲しながらも、今のリアリティー（現実）から何かを模索していきたいと考えています。



石崎 隆幸

いしざき たかゆき

はじめまして。あわら市芦原中学校、石崎隆幸です。よろしく願いいたします。

昨年度、市教育委員会から県教委が募集している教職大

学院教員派遣への応募を勧めていただきました。以前から少し興味もあり、校務との両立に不安もありましたが応募させていただきました。大学院説明会への出席、願書提出、入試オリエンテーションを経て、受験。合格発表後は、県庁での事前研修と説明会、大学院の開講式、記

念撮影と、本当に慌ただしく日々が過ぎていきました。

福井大学を卒業して26年。平成22年夏に免許更新講習で3日間大学に通いましたが、その後再び大学に通うことになるとは考えてもいませんでした。免許更新講習の時は、総合研究棟Iと家との往復のみ。大学院生になるために久しぶりに入った1号館は、改装され見違えるようにきれいになっていました。ライトは自動で点灯し、部屋の配置も変わっていました。開講式の日、昔入り浸っていた5階の研究室前まで行ってみました。再編で研究室はなくなったことは知っていましたが、部屋の看板がないことを確認しやはり寂しく思いました。26年の時の流れを実感した次第です。

さて、大学院生として2ヶ月が過ぎました。合同カンファレンスでは、先生方の実践を聞かせていただくこと

ができました。所属校の現状や課題、向かうべき方向性をしっかり把握され実践を重ねている姿を目のあたりにし、「自分は何ができるのだろうか。」と、正直焦りも感じています。森先生、小林先生にはわざわざ芦原中学校においていただきました。その都度、研究主任として心がけることはもちろん、本校の先生方の努力や頑張りを認めてくださって、さらに授業力を向上させるための助言もいただいています。

本年度、学校では「学年主任」と「研究主任」をさせていただくことになりました。一昨年までの2年間、教職大学院生として芦原中の研究体制を整えてくれたS先生をはじめ本校の先生方と一緒に、芦原中学校がこれから向かうべき研究の方向性をより確かにしていきたいと考えています。



青木 敏之

あおき としゆき

今年度、スクールリーダー養成コースに入学しました青木敏之です。現在、越前市武生第三中学校に勤務しています。今年度で本校に勤務して4年目になります。過去の勤務校では、担当教科が技術科ということもあり、ICTの発達に伴って、出席簿や通知表・要録作成、時間割変更や連絡事項の教室配信等、コンピュータを活用して教職員の負担軽減につながるシステムの開発に携わることがよくありました。しかし、自分一人の力ではどうにもならないことも多くありました。そんなとき、多くの先生方からアイデアをいただき、コンピュータの技能に長けた先生方に助けていただいて事態を切り抜けてきました。この経験から、一人で何かをするより、周囲の人々の得意分野を活かし、組み合わせることによってより大きな成果を得られる、そして自身の学びにもつながると実感しました。また、個々の得意分野には違いがあり、教職員は数年で異動し顔ぶれも変わる、そういった様々な要因を考慮しながら「組織」や「仕組み」を作らなければ学校の財産として長続きしないということも分かりました。そのためには、全体を見通したマネジメント

ができなければと考えていました。そして今回、教職大学院で学ぶ機会を与えていただきました。いろいろな経験をされてきた先生方のお話をお聞きし、感心することや新たな視点からの事例など、毎回沢山の刺激をいただいています。

本校では、福祉総合として、道徳の時間、総合的な学習、学級活動各時間を使って、各学年毎に福祉に関する取り組みが行われています。校内ではなく地元地域の活動に参加してのボランティア活動も多くあります。そういった活動を通して、生徒の豊かな心を育成することを目的の一つとしています。一つひとつの活動は担任や担当者の個々の努力によって支えられている部分が多くあります。さらにいくつかの活動には保護者や地元地域との関係が欠かせないものもあります。生徒を地域の中で活動させることで得られるものが大きい代わりに、その分の苦労も担当者にはあります。今回、教職大学院で学ばせていただく機会を活かし、多くの方々からアドバイスや刺激をいただきながら、先生方の力をよりよく学校全体の組織力として活かせる「組織」のありかたを見いだしたいと考えています。そして、それらが学校の重要な柱となり、生徒達のよりよい成長につながればと考えています。どうぞよろしく願いいたします。



赤井 孝行

あかい たかゆき

初めまして、今年度より教職大学院スクールリーダーコースに入学した赤井孝行です。

教員生活25年目で、中学校に12年間、小学校に12

年間勤務していました。専門教科は算数・数学です。小中のバランスを考えていたら、たまたまこのようにバランスよく勤務することができました。

中学校では、生徒指導主事を中心に取り組んでいました。そこで、学んだことは生徒指導と学習指導のバランスです。教材研究の中で、生徒指導の三機能と言われて

いる自己有用感の場、共感的人間関係の場、自己決定の場を必ず取り入れていくことの大切さです。中学生の時期は、自己肯定感が希薄になりがちです。このような時期に教科指導の中で自己肯定感が高まるような工夫が大切だと感じました。

小学校では、主に高学年の学級担任をしていました。ここで、学んだことは褒めることと叱ることのバランスです。学級全体を叱らなくてはいけない場面があります。その時に、以前どれだけたくさん集団全体を褒めることができたかが大切になってきます。叱りすぎると小学生は萎縮してしまっ、伸び伸びと成長できません。大人や先生の顔色を見ながら生活してしまいます。子どもは伸び伸びと大きく育たなくてはけません。褒める場面では、思いっきり褒めてきました。

大学院の入学のチャンスを与えてくださった今、大切にしていきたいことは過去の自分とこれからの自分のバ

ランスです。4月と5月の合同カンファレンスを終え、戸惑うことばかりで過去の自分を振り返ることはできても、これからの自分、研究のテーマに沿った活動に取り組んでいく自分というものを見つけることができいていません。これから、見つけなくてはけません。

2回の合同カンファレンスを終え、帰りの2時間半の車の中でいつも振り返ることは「学び合い」という自分自身の研究テーマとの繋がり方や月曜日からの名田庄小学校での取り組みのことです。それぞれの種が、学び合いの芽になり一つの柱になっていくにはどうするのだろうか、学校でどのように取り組めばいいのだろうかと考えています。考えがもつれだすと南条のスタバでコーヒーを飲みながら、気分転換をはかります。このような週末をあと何回か過ごすうちに過去の自分とこれからの自分がバランスよく登場してくるであろうと期待しています。今後どうぞ、よろしくお願ひします。

書評

編著：秋田喜代美、キャサリン・ルイス・明石書店

『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』

「レッスンスタディは、教師が他の教師の授業から相互に学び合うことを奨励するだけでなく、時間と共にその教師の学習が授業をよりよいものへと変えていく成果を生み出してきている。」（本書p24より）

日本の教師による授業研究は国際的に評価されている。それらは1990年代後半よりレッスンスタディとして海外で紹介され、現在では20カ国以上の教師たちが取り組んでいる。本書は歴史的視座や経営、工学等、授業研究への数多くのアプローチの中でも、教師の学習過程という視座から学校種や教科を超えて「レッスンスタディ」として捉えることをねらいとした本である。主な内容は、海外の研究者によるレッスンスタディの捉え方や定義、ならびに日本・アメリカ・香港の研究の特徴の記述をはじめ、日本国内の研究者がそれぞれの視点を持ってレッスンスタディについて語っている。

例えば、丸野・松尾は「対話」について着目し、教師の対話による授業実践やその認識について言及している。子どもを学びの主体とする授業の営みの重要性を説くとともに、対話による授業実践を行う際、教師の即興的思考はもちろんのこと、授業を営んでいる自分の思考過程や感情状態を再び思考の対象とするメタ認知的な省察的思考が求められることを示している。また、本教職大学院の専攻長である松木は「学校を変えるロングスパンの授業研究の創

造」という題目の中で、授業研究を通じた教師自身の成長を省察することについて述べている。本学や教職大学院での実践を基に、形式知や暗黙知、さらには物語知からのアプローチによってレッスンスタディの意味（価値）付けを行っている。

上記は本書の一部であるが、本書を通して描かれているレッスンスタディの在り方や考え方は、現在の日本が要求している教師教育の一助を担うものであろう。レッスンスタディという、教師が授業実践の省察を通して学んでいく探求のサイクルは、教師の専門性の向上とそれに伴う授業の充実を実現していくために必要な要素である。

本書は国際的に日本の授業研究が価値付けされていった理由と、意味の再認識、それらに研究者による論理的なアプローチを加えることで、まさに「レッスンスタディへのいざない」を示してくれているのである。

（福井大学教職大学院 藤井佑介）



平成25年度

第1回運営協議会が開催されました

平成25年5月13日(月)に、今年度第1回運営協議会が開催されました。中田隆二・教育学研究科長の挨拶、小和田和義・福井県教育庁企画幹(学校教育)の挨拶に続いて、全体協議およびグループ別協議が行われました。

全体協議では、今年度の本学教職大学院の運営(案)ならびに年間計画(案)、更に来年度の学生募集スケジュール等について慎重な審議の後、全会一致で承認さ

れました。また、グループ別協議では、県教育委員会、市町教育委員会、拠点校、連携校の小グループ毎に、それぞれの機関における教師教育・教員研修等の現状と課題について、教職大学院に対する評価・要望も含めて活発な意見交換がなされました。

当日、来賓として出席いただいた小和田企画幹の御挨拶を紹介致します。

福井県教育委員会を代表して、一言ご挨拶申し上げます。

福井大学教職大学院におかれましては、全国から注目されている「学校拠点方式」による実践的な教師教育を推進しておられます。68名の大学院修了者の皆さんは、学校現場や教育行政で活躍されており、本県教員の資質・能力の向上に多大なお力添えを賜っております。これまでの御指導に、深く感謝し厚くお礼を申し上げます。

今日の学校には、学力の向上、規範意識の醸成、「いじめ」「不登校」の解決など、多くの課題が山積し、その解決のためには、教育内容と教育活動を一層充実させていく必要があります。また、社会を取り巻く環境の変化や価値観の多様化による児童・生徒・保護者への対応など、教員は多岐にわたる教育課題にも日常的に対応していかなければなりません。そのためには、教員の資質・能力の向上が不可欠であり、各学校で行われている実践的な授業研究など、教員が互いに学び合う機会を一層充実させる必要があります。

また、教師一人ひとりの力量を高めていくことはもちろん、学校としての教育力を向上させ、組織的に課題解決を図っていく必要があります。学校を個人の集合体ではなく、一人ひとりを有機的に結び付ける組織として考えられる教員が必要となります。そのような役割を果たすのがミドルリーダーです。学校や地域における指導的役割を果たし、確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたリーダーを養成することが急務となっています。

福井大学 教職大学院では、現在の学校における課題を中心に、学校と連携しながら、長期にわたって実践的な協働研究を進めておられます。これは、教員本人だけでなく、校内組織全体の力量アップに結び付きます。校内の中核となるミドルリーダーが中心となり、世代を越えて互いに学び合うシステムを作ることにより、学校全体の教育力は大きく向上してまいります。

県でも昨年度、「ミドルステップアップ研修」を大学院との連携により、勤務校での学校改革を前提とした、1年間にわたるスタイルに大きく変更しました。基本研修にも、自身の教育実践を記録して、世代を越えて語り合うクロスセッションを導入しました。これらは、教職大学院の「学校拠点方式」の特長を取り入れたものです。大学院で研修する教員一人ひとりが、これまでの教育実践を振り返り、大学院の先生方から教育学や教育方法に関する最新の知見を吸収し、本県教育の核となる存在になれることを期待しています。

福井大学教職大学院の質の高さは、そのシステムの質や先生方の熱意の高さ等、多くの要因によりますが、大学院と県教育委員会との連携も一つの要因だと考えております。より一層の連携で、学校拠点方式を推進し、多くの教員が、大学院の先生方との人的ネットワークを広げ、教職大学院と本県との連携の架け橋となることを期待しています。

本日の協議会が、実り多いものになりますよう祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。



フィリピンより2人の研究者との研究交流



福井大学教職大学院 協働研究員 佐分利 豊

0 はじめに

去る6月3日(月)からの1週間、フィリピンからお2人の研究者が福井大学にお見えになりました。フィリピン大学数学研究所教授のフィデル・ネメンゾーさんと、デ・ラ・サール大学数学科講師でリリーローズ学校の中学校校長でもあるポリン・マンガラプナンさんです。お2人が見えになられたのは、当教職大学院や福井で進められている授業研究を中心とする学校改革のとりくみに強い関心を持たれてのことでした。訪問期間中、当教職大学院の他、当大学数学教室、および当大学附属小・中学校を含む福井市内のいくつかの小学校、中学校、高等学校などをほとんど休む間もなく精力的に訪問され、充実した研究交流を行って帰られました。

お2人が福井の授業研究や学校改革に関心を持たれたのは、去る2月にフィリピン・ミンダナオ島のキダパワン市で開かれた「ティーチング：12年間の基礎教育における言語、算数・数学、社会科のカリキュラムに関する研究集会・ワークショップ」において、私が当大学附属小学校の山崎千代美先生の授業実践¹⁾を紹介してきたことによります。



1 フィリピンにおける教育改革

フィリピンでは、この6月に新しい教育制度にもとづく大改革が開始されています。ミンダナオでの研究集会・ワークショップは、その準備のために開かれた全国的な規模の集会のひとつで、現場の先生方も多数参加しておられました。その改革は、「拡大・強化された(Enhanced)2013年基礎教育法」と呼ばれる新法にもとづくもので、これまで小・中学校の10年間であった義務教育の期間を高等学校までを含めた12年間に延長するということと、教育・学習言語の変更とカリキュラム改革とからなる

教育方法の転換がその主な内容となっています。この改革は、フィリピンの初等・中等教育を21世紀の世界標準に対応させるためとされ、新法には次の教育目標が掲げられています。すなわち、この新たな基礎教育課程の修了者には、生涯をかけた学習の基盤的素養、あるいは職業に生産的に従事することのできる能力、地域およびグローバルなコミュニティにおいて実りある調和的共存を図ることのできる適応力、自律的で創造的かつ批判的に思考することのできる才能、および他者と自分自身の転換をもたらすことのできる資質と意欲を身につけていることが求められる、とされています。教育方法の転換というのは、それをめざしてのことです。

MTB-MLEの導入

まず教育・学習言語の変更というのは、これまで授業などで用いられていた言語は英語とフィリピン語の2つに限られていたのですが、それを小学校に限って、子どもたちが普段使っている言語、すなわち母語をベースとした多言語による教育・学習(MTB-MLE, Mother Tongue Based Multi Lingual Education)に移行するということです。これは、フィリピン語がおよそ170の言語の内のひとつであるタガログ語とほぼ同じであり、英語と同様に、大半の子どもたちにとっては生活言語とは異なっているという事情によります。タガログ語を使用しているのは、全人口9400万人の内のおよそ2200万人であると言われています。この移行に先立つMTB-MLEのパイロット事業でもその有効性が確認されており²⁾、国際的にも、いきなり第2言語を学習用語とするよりも、最初に母語(第1言語)をしっかりと習熟した後に第2言語の学習をとり入れるという方が、双方の言語学習にとって有効であるという報告がなされています³⁾。

カリキュラム開発の新しい基準と原則

さらにカリキュラム改革ということですが、それについては、カリキュラム開発にあたっての基準と原則として以下の8点が新法に掲げられています。

- a) カリキュラムには、学び手を中心とする、包括的かつ発達段階に見合ったものであることが求められる。
- b) カリキュラムには、今日的課題に対応した、かつ研究成果にもとづいたものであることが求められる。
- c) カリキュラムには、学び手の文化に配慮したものであることが求められる。

- d) カリキュラムには、学びへの文脈をもったグローバルなものであることが求められる。
- e) カリキュラムには、構成主義的で、探究的、省察的、協働的かつ総合化された教授法を用いたものであることが求められる。
- f) カリキュラムには、学び手の学習の現段階、あるいは彼らが既知としている所から出発して未知の領域に歩を進めるといふ、MTB-MLEの原則と枠組みに沿ったものであることが求められる。そして、そのための適切な教材と、それに適応できる教師が求められる。
- g) カリキュラムには、知識や技能の習得を確実なものとするために、スパイラルな構成とすることが求められる。
- h) カリキュラムには、学校が、それをそれぞれの地域的・社会的・文化的文脈に適合させ、さらに改善されたものとするができるよう、十分に柔軟性をもたせることが求められる。

私が上述の研究集会・ワークショップへの参加の機会をいただいたのは、この改革のめざす方向に、今日、福井でとりくまれている授業研究を中心とする学校改革と共通する部分があるとの共通理解によるものでした。とりわけ、MTB-MLEが小学校に導入されるということ、教育改革のビジョンの共有を目的として、福井の小学校における探究的授業のとりくみを紹介したということでした。これまでの2言語による学習の枠組みの中で探究的学習を行うことは、大変難しいことだったのではないかと推察します。

2 学校訪問と研究交流

最初に述べましたように、お2人が福井の授業研究や学校改革に関心を持たれたのは、附属小学校の山崎先生による探究的授業実践の紹介を受けてということでしたので、今回の福井訪問では、できるだけ多くの学校のとりくみを見ていただくことにしました。以下、それぞれの訪問について、日を追ってその概要の紹介をします。

6月4日（火）の訪問

まず、6月4日（火）の午前中には、福井市旭小学校で、勝木先生の6年生の算数の授業を見学させていただきました。その日の問題は、2つの分数でそれらの商と差が等しい組を探すというものでしたが、算数があまり得意ではなさそうな子どもも含めて、そのような2つの分数の組みが満たす法則の解明にグループの皆で熱心にとりくんでいました。これは、勝木先生の問題設定が上手であったことによるもので、お2人にとって幸先のよい訪問となったように思います。

その日の午後は教職大学院への訪問となりました。まず、お2人からフィリピンの教育改革に向け

ての現状と課題についての説明がなされ、ほとんどすべての先生方にとってMTB-MLEは未体験のとりくみであり、授業研究によって皆で新しい課題に挑戦していきたい、特に子どもたちが自分たちの言葉で語りあえるようになったということ、子どもたちの協働による探究的授業づくりにとりくんでみたいとのことでした。その後、お2人と教職大学院の5人のスタッフにより、午前中に見学した旭小学校での6年生の算数の授業についての徹底した検討が行われました。お2人にとっても充実した授業研究の体験となったものと思われま

6月5日（水）の訪問

続いて5日（水）の午前中は附属小学校を訪問させていただきました。まず、研究主任の名葉先生から附属小学校の研究と改革の歴史やポリシーおよび研究体制などについておうかがいし、続いて五十嵐先生の6年生の算数の授業と、青木先生の4年生の理科の授業見学をさせていただきました。算数の方は割合の表現に関する復習の授業で、理科の方は人体の全身骨格模型を使い、それぞれの骨がどのような役割を果たすのかということの探究的考察を行うというもので、それぞれにグループで熱心な議論が交わされているようすを見ることができました。特に、フィリピンでは算数・数学以外の探究的学習についてはほとんどとりくまれていないようで、その点もお2人の関心をひいたように思われます。

その日の午後は、福井市安居中学校を訪問させていただきました。ここでは、北川先生の数学の授業や、高嶋先生とALTのマーフィー先生による元気一杯の英語の授業、加藤先生による化学反応熱に関する理科の探究的授業の見学をさせていただきました。

数学の授業の課題は、校舎の中央をとり巻く大きな円形の通路の面積を求め、それをもとに同種の図形の面積を求める公式を作るという課題で、文字の使用に慣れることとその有効性を理解してもらおうということを狙ったものでした。派手さはないものの、子どもたちがグループで集中して問題にとりくんでいたのが印象的でした。

その後、教頭の徳永先生と数学の見崎先生に学校改革のとりくみ、特に放課後の校内清掃と、その後





事前説明会 平成25年7月6日(土) 13:00-17:00

文京キャンパス総合研究棟 I 13階会議室

- 【出願期間】 9月3日(火)~6日(金) 最終日17:00まで
- 【ガイダンス】 9月14日(土) 10:00-12:00 文京キャンパス総合研究棟V 6階
- 【選抜期日】 9月21日(土・祝)
 - 9:00-10:30 専門科目A 学校改革実践研究の基礎
 - 11:00-12:30 専門科目B 教育実践の分析
 - 13:30- 口述試験
- 【合格者発表】 10月1日(火)
- 【入学手続き】 12月11日(月)~17日(火)
- 【入試についてのお問い合わせ】

〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学学務部入試課
TEL: 0776-27-9927 E-mail: g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

Schedule

- 6/29sat - 6/30 sun 専門職として学び合うコミュニティを培う／実践研究福井ラウンドテーブル2013
- 7/6 sat 合同カンファレンス
- 7/13 sat 合同カンファレンス(予備日)
- 7/22mon - 7/24 wed 夏の集中講座(1a)
- 7/25thu - 7/27 sat 夏の集中講座(1b)
- 7/29mon - 7/31 wed 夏の集中講座(2a)
- 8/1thu - 8/3 sat 夏の集中講座(2b)
- 8/19mon - 8/21 wed 夏の集中講座(3a)
- 8/22thu - 8/24 sat 夏の集中講座(3b)
- 9/21 sat 大学院入試

【編集後記】

6月も中旬となり、梅雨の季節になりました。いよいよ今年度のラウンドテーブルも開催を迎えます。新任の私にとっては初めての経験となります。これまで丁寧に紡いできた教職大学院の実践と、全国各地で積み重ねられてきた豊かな実践が互いに交流し、コラボレーションすることで、あらたな探求が生まれることと思います。

今回のNewsletter No.54では松木専攻長の巻頭言を筆頭に、院生の紹介文、さらにはフィリピンからいらした研究者との交流、附属中学校ならびに富山県堀川小学校の研究大会の実施・観察記録、ラウンドテーブルにおける各Zoneの紹介など、より内容が濃いものとなっております。次号は、ラウンドテーブルの実際の様子をお届けしたいと思います。(藤井)

教職大学院Newsletter No.54

2013.06.29発行

2013.06.29印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp

の一日をふりかえる黙想、およびそれを数行で記す日誌作りについておうかがいし、実際にそれらを見学させていただきました。これらの作業も派手さはないものの、ひとつひとつしっかりと集中してとりくまれていました。安居中学校の校舎がゆったりとした作りであること自体が、子どもたちの学習への集中を生み出す環境となっているように思われました。つまり、ゆったりとした校舎が探究するコミュニティ作りを支える物理的な条件となっているようであるということです。これらのことについては、フィリピンのお2人も同様の感想を抱かれたようです。特に、放課後の清掃、黙想、日誌作り、あるいは授業の開始時と終了時の挨拶はフィリピンにはない学校文化ではあるけれども、子どもたちに彼らと教師および学校との関係、そして子どもたち自身をその都度ふり返らせる機会を与えるものとして、フィリピンに帰ってリリーローズ学校の先生方にその実施の提案をしたとのこと。その提案は歓迎されて早速実施に移されたとの知らせをいただきました。こうして、安居中学校への訪問も、あまり派手なことはなかったものの、お2人にとって意義深いものとなったようです。

この訪問では、見崎先生の提案で最後にもうひとつハプニングが起こりました。2年生の数学でこれから連立1次方程式の解法を学ぶことになっており、ポリンさんにその授業を行ってほしいというものでした。ポリンさんは、1次方程式が直線の方程式であり、連立1次方程式の解が2直線の交点の座標を表すということを、ホワイトボードに図を描きながらほのめかしました。子どもたちは、直線の方程式についてはまだ学習していなかったのですが、そのほのめかしを読みとり「オーッ!」とどよめき、その後も話がひとつ進むごとに拍手と歓声で喜びと感激を表してくれました。このことは、安居中学校の子どもたちが学びの喜びを数多く体験しており、その期待感をもって学びに向かっているために起こった反応なのだろうと思われました。また、ポリンさんのミニ授業は英語でなされ、所どころ私が単語の意味を補足することで通じていたのですが、子どもたちは、ALTの先生との日常的な英語の会話の体験をしているものの、それが他の教科の学習でも同様に通じるものなのだという体験をしたことは、別の意味で貴重なものとなったのではないかと考えています。

6月6日(木)の訪問

翌6日(木)の午前中は附属中学校を訪問させていただき、研究主任の森田先生、英語の加藤先生および教頭の大正先生から附属中の研究や改革の課題についておうかがいし、質疑応答が交わされ大いに共感しあうことになりました。その後、大正先生の方眼紙を用いて作った整数値の面積を持つ正方形を組みあわせて平方根どうしの間になりつつ関係を見つけ出すという授業を見学させていただきました。こ

こでは、何故そのような関係が成りたつのかということをはっきりとすることが目標なのですが、子どもたちが自分たちの推論の根拠を丁寧にふり返りながら進めているのが印象的でした。自立した学び手への一歩を踏みだし始めている姿を見ているようにも思えました。ここでも子どもたちの集中した学びの姿を見ることができました。

続いてその日の午後は、藤島高等学校を訪問し、山内先生の数列の授業を見学させていただきました。その日は、ハノイの塔の漸化式を実験のくり返しによって求めるというのが課題でしたが、その漸化式が成りたつ理由の説明を全員で共有するためにはやや時間が足りなかったかという印象でした。しかし、ここでも子どもたちがグループごとに集中して作業に取り組んでいる姿を見ることができていました。その後に行われた授業のふり返りでは、ポリンさんと山内先生との間で協働研究ができればとのこと、ここでも研究交流の継続を求める声から出されていました。

さらにその日の夕方は、当大学の数学教室を訪れ、フィデルさんが自身の整数論の研究の講演をしてくださいました。フィデルさんはフィリピンにおける数学研究のリーダーの1人で、今回、そのような人が福井の初等・中等教育の見学に訪れたことは、フィリピンの人たちの教育改革にかけ強い意気込みを表しているのではないかと思います。

6月7日(金)の訪問

さて最終日の7日(金)ですが、その日は附属中学校の公開研究会に参加させていただきました。この日の研究会の参加者数は500名ほどであり、そのこと自体、お2人にとっては印象的なことではなかったかと思われます。数学科では、草桶先生と柳本先生のお2人の研究授業を見せていただきました。ここではそれらの授業もさることながら、その後の分科会でさまざまな意見交換がなされたことが、フィリピンのお2人にとっては印象的であったようです。

おわりに

以上、お2人の福井での交流について簡単に紹介してきましたが、それぞれに意義深い、あるいは内容豊かなものであったことを推察いただけるのでは



ないかと思ひます。このことは、福井における学校改革が一定程度前進あるいは定着しつつあることを示しているのではないかと思ひれます。実際、毎回の授業見学ごとに、子どもたちの集中した学びの姿を見ることができたと記してきましたが、このことは率直にいつて私が7年前に福井に来たときと比べて大きな変化です。それが何故なのかというのは現場の先生方におうかがいしなければ本当のところは

分からないのですが、実際に見学をさせていただいた私の印象からは、それぞれの所での探究的学習の前身と定着を示しているのではないかと思ひれるのです。

また、今回、フィリピンからお2人の研究者がお見えになりましたが、これからもさまざまな人々との交流が広がっていくことを期待します。

注)

1) 山崎千代美, 算数の学びを「つながって、つくる」そして「いかす」, 研究紀要第32集, 2007年福井大学教育地域科学部附属小学校

2) Dutcher, Nadine, Richard Tucker: The use of first and second language in education, A review of international experience. Pacific Islands Discussion Papers No. 1, Washington D.C., The World Bank, 1994

3) Alidou, Hassana, Aliou Boly, Birgit Brock-Utne, Yaya Satina Diallo, Kathleen Heough and H. Ekkehard Wolff. 2006. Optimizing learning and education in Africa—the language factor. A stock-taking research on mother tongue and bilingual education in sub-saharan Africa. Association for the Development of Education in Africa.



◆研究集会の報告◆

福井大学教育地域科学部附属中学校研究集会に参加して

スクールリーダー養成コース1年／福井大学教育地域科学部附属中学校 木下 慶之

6月7日(金)は本校の第48回教育研究集会に御参会いただき、また貴重な御助言、御支援をいただきまして誠にありがとうございました。今年度は県内外より約600名の方が御参会くださいました。本紙面をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

午前中は公開授業Ⅰ・Ⅱとして計18の子ども達の活動の様子を見ていただき、午後は教科ごとの分科会にて、見取った内容をもとに教科の本質について語り合う時間を設定させていただきました。さらに続く全体会では、本校研究主任である森田史生教諭より研究の経過報告がなされ、最後にシンポジウムを開きました。今年度のシンポジウムは、東京大学大学院教育学研究科の秋田喜代美先生と、慶應義塾大学教職過程センターの鹿毛雅治先生に御登壇いただき、「子どもたちの学びをつなぐ～子どもたちが学びを実感できる授業を構築するために～」をテーマに貴重なお話、御助言をいただくことができました。

また、今年度は、新たな試みとしまして、公開授業Ⅱの時に「学級活動」を、そして昼食休憩中に

は、音楽委員主催の「音楽集会に向けた全校合唱練習」の様子も公開いたしました。子ども達の学びの場は授業だけではなく、学級活動や生徒会活動、総合的な学習の時間(本校では学年プロジェクト)など、学習活動すべてが連動し合っており立っています。授業参観だけでは見えてこない、子ども達の活動の様子、学びのつながりについて、限られた時間ではございましたが、感じ取っていただけていましたら幸いです。

さて、本校は「探究」と「コミュニケーション」をキーワードにして教育の実践、研究に取り組んでおります。5年サイクルで第Ⅶ期「探究するコミュニティの創造」、第Ⅷ期「学びを拓く《探究するコミュニティ》」として10年間《探究するコミュニティ》を主題のキーワードとして掲げてきました。今年度は第Ⅸ期の新研究主題を設定して臨んだ最初の教育研究集会でした。これまで約4ヶ月に渡って教員全員で検討を重ねてきました。「《探究するコミュニティ》というフレーズをどうするか」、「さらに研究をどう深め、発展させていくべきか」、教

■ Session 0 オリエンテーション 12:40-12:50 (AOSSA 6階:参加受付ブース有)

■ Session I ポスターセッション 12:50-13:50 (AOSSA 1階アトリウム・4階・6階)

「世代をこえて学び合うコミュニティをコーディネートする」

福井市・越前市公民館 福井市教育委員会生涯学習室
福井大学履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」実行委員会
福井大学探求ネットワーク 福井大学EMP実行委員会 他

■ Session II シンポジウム 14:00-15:20 (AOSSA 6階レクリエーションルーム)

「持続可能なコミュニティをコーディネートする」

【シンポジスト】

竹谷 強 氏(島根県松江市古志原公民館 館長)
穴沢 義晴 氏(NPO法人コミュニティワーク研究実践センター事務局長)
松井 章江 氏(福井市円山公民館主事)

【司会】 羽田野 慶子(福井大学)・熊野 直彦(福井市教育委員会)

■ Session III フォーラム 15:30-17:40 小グループでの実践交流

【総合司会】 田中志敬(福井大学)

Zone D 授業 授業改革の扉をひらく

学びの専門家を目指す教師たちは、常に「子どもたちの成長発達を支えていく根幹となるような学力を培うことができるのだろうか」「子どもたちの持っている様々な可能性を引き出すことができるのだろうか」といった問いを抱きながら、その探究の確かさを自らの実践に求めてきました。Zone D【授業】は、そんな教師たちの学びの姿に光を当てながら、教科や校種の枠を越えた授業改革への可能性を探る実践コミュニティを創出していきたくと考えています。今回のラウンドテーブルには、「授業改革」という終わりのなき旅を冒険家のような好奇心と感性を抱いて行脚する三人の先生方をお迎えします。

お一人目は、国語教師としての己の哲学を貫き続ける宮本浩子先生(鳴門教育大学附属小学校教頭)、お二人目は、子どもがコミュニケーション活動を通して「自ら学ぶ」ことにより動きの高まりを実感できる授業づくりを進める新進気鋭の体育教師岩見光洋先生(岐阜市立長良東小学校教諭)、そして三人目は、「学び合い」をテーマとした他教科の先生方との授業研究を通して「授業改革」に取り組み始めた若き数学教師外山康平先生(金沢大学附属高校教諭)、をお迎えする予定です。

教職年数も担当教科も異なる三人の先生方の報告には、参加者一人一人の実践の歩みや授業改革とも繋がる様々な扉が潜在していることでしょう。今回のSessionが、互いの実践に潜む授業改革の扉の存在やその意味を再発見できる場となることを期待しています。

■ Session I ポスター発表 12:50-13:50

授業改革を目指して取り組んできた授業プログラムの実践と省察をポスター発表します。学校や授業における活動の可能性を貪欲に探究していこうとする教師・学生たちの取り組みから、思いもよらぬ授業改革への扉を発見することができるでしょう。

■ Session II シンポジウム 14:00-15:20

Zone Dのテーマを参加者全員で共有するために、3人の報告者の方に、「授業者は冒険家であるべきか」という共通の問いを立てて、ご自身のこれまでの実践プロセスを振り返っていただきます。

■ Session III ワークショップ 15:30-17:40

報告者たちの発表を振り返りながら、小グループで「授業改革へと突き動かすもの」、あるいは「授業改革によって何が動いたのか」といった課題へと発展させながら議論を深めて行きます。同時に、参加者一人一人の授業改革に対する課題意識も息づかせながら、授業改革の扉をひらきます。

① 学び合う組織づくり

福井市光陽中学校（研究主任 林 秀昭先生）・東京都赤塚第二中学校（岡部 誠先生）

② 学校を変える取組み・働きかけ「協働体制づくり」

福井市教育委員会（指導主事 大野 喜美恵先生）・福井県特別支援教育センター（野村 陽子先生）

③ 外部とのつながり「地域・学校が変わる」

勝山市立鹿谷小学校（平林 茂将先生）・福井県立春江工業高校（富田 裕之先生）

Zone B 教師 インターンシップは教師の職能開発に有効か？

知識社会の出現と進行にともなって教育改革のうねりが全国的に広がっています。特に、昨年末の政権交代によって我が国の教師教育改革には新たな「波」が押し寄せています。その「波」の一つが、政権与党・自由民主党の教育再生実行本部が平成23年5月23日にまとめた内閣への第二次提言、その中にある「『新人材確保法の制定』に関する提言」です。そこでは、教員養成における「教師インターン制度」の導入の検討をうたっており、これは、「新任の教師を十分な指導・評価体制の下で育成し、厳格に教師としての適正を判断できるシステム」としての位置づけです。これと同時に、教職大学院の拡充方策と教育委員会の「教師塾」の全国展開も標榜し、採用前の教員養成に実践的指導力の育成をねらった体制整備も検討されています。

このような教師教育改革をめぐる現在の動向に鑑み、今回のZone Bでは教員養成における「インターンシップ」に焦点を絞り、その有効性や課題について参会者の皆様と議論を深めたいと思います。特に、福井大学教職大学院では採用前の教員養成システムとして全国に先立って「長期インターンシップ」を実施しており、その全国への普及に関しても教師教育改革コラボレーションの取組の中で議論を進めています。そこで、福井大学教職大学院の取組の一つの手がかりとしながら、いかなる「インターンシップ」や「教師塾」の取組が教師の職能開発、特に採用前と採用直後の新しい世代の教師の職能開発にとって有効となりうるのか、教員養成および現職教育に関して教育委員会・学校・大学の三者がいかに協働することで質の高い教師を育て、教師の生涯にわたる継続的な学びを支え促すことができるのか、これらの論題についてポスターセッション、シンポジウム、フォーラムを通して議論していきます。

■ Session I ポスターセッション 12:50-13:50 （1階ロビー）

インターンシップ、教員養成・現職教育に関する教育委員会、学校、大学・大学院、大学院生によるポスター報告に基づき、参会者で互いの実践を交流します。

■ Session II シンポジウム 14:00-15:20 （6階 コラボレーションホール）

「インターンシップは教師の職能開発に有効か？」

【報告者】 花本明（和歌山大学・教授）・川本治雄（和歌山大学・教授）
小林弘幸（福井市中藤小学校・校長）・木村優（福井大学・准教授）
荒瀬克己（京都市教育委員会・教育企画監）
荒川元邦（東京都教職員研修センター・主任指導主事）
木村 奨（横浜市教育委員会・主任指導主事）

【コメンテーター】 白水始（国立教育政策研究所・総括研究官）
君塚剛（文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室・室長補佐）

■ Session III フォーラム 15:30-17:40 （6階 コラボレーションホール）

シンポジウムの議論をうけて、参会者全員で議論を深めていきます。

Zone C コミュニティ 学び合うコミュニティを培う

この間、Zone Cでは、コミュニティの発展における「持続性」の問題を共有し、検討してきました。知識基盤社会という言葉に象徴されるように、21世紀を生きる私たちが地域や職場で出会っていく課題は、個人的・個別的な取り組みでは必ずしも解決しえない、より複雑で高度なものへと変化し続けています。地域の発展を支える自治や学習についても、その持続的な展開をどのようにコーディネートしていくかがこれまで以上に問われています。これは、コミュニティの持続的な発展に向けて、世代をこえてつながり学び合うことをどのように支えていくことができるのかという課題です。

今回、福井市教育委員会生涯学習室・福井市中央公民館の協力の下、実践の交流をさらに広くコミュニティにひらいていく試みとして、Zone Cの会場をJR福井駅東口前のAOSSAに移しました。地域、世代、領域をこえて互いの実践の展開を捉え直し、<人や組織をつないでいくこと>、<世代のサイクル・新しい実践の担い手>、<コーディネーターの力量形成>といった視点から上記の問いを深めていきます。

員全員で語り合い、考えられていきました。議論の末、「《探究するコミュニティ》、これは学校という公教育の場としての究極の目標である」ということをみんなで再認識することになり、第IX期新研究主題「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」が設定されました。このテーマを設定していく中で、個人個人が改めて教育について、教科の質について、探究、協働についての考えを見つめ直し、また同僚との対話を通して自分の考えを広げ、深め、その考えを互いに認識し合うことができました。さらに、1年次サブテーマとして「省察を捉え直し、次なる学びに生かす」が設定されました。

私は本校に赴任して今年度で4年目となります。これまでは「探究？コミュニティ？探究学習ってどう展開するのだろうか？自分は経験してきてないしなあ」と手探り状態、とりあえずは先輩方の実践を真似してみたり、安易にグループ学習を取り入れたりしていましたが、その都度失敗したり、その意義を実感していないままの実践であることに気づき、打ちのめされたりしてきました。そんな3年間でした。

今年度は新しく5名の方が赴任して参りました。私もそうでしたが、4月赴任早々に、公開授業の学年と単元の主題を構想することになります。早速、本校の実践者としての準備を迫られるのです。今年度は「自分が先輩教員からしていただいたように、今度は自分ができる限りサポートしなければ」と、さらに違った意識で準備に臨むことにしました。た

だ、自分がまだまだ未熟者、自分の実践で精一杯になってしまい、十分なサポートができずに6月を迎えてしまいました。4月赴任し2ヶ月後には研究集会というのはよく考えると過酷なことです。しかし、教員全員が実践者、運営者という立場を経験することで、教員の中に一体感、連帯感が得られていきます。なかなか言葉では表現できないのですが、研究集会を終えると本校の教員は「同僚から同志となる」と言われております。研究を意識した実践は、みんなが悩みます。しかし、子ども達がワクワクしながら学ぶ姿、将来につながる学びを実感できる場を展開、デザインできるようになることをめざし、私たちは協働で授業作りを進め、学び合っていきます。他教科の授業も共に構想し合います。これまで培ってきた観念、概念を一時崩し、再度組み直していきます。そこには今まで考えることのなかった新しい視点や自分の教育観の本質に出会えるチャンスがあります。研究集会を終えた今、集会を通して得た学び、連帯感を、教員も子ども達同様、次なる学び、実践につなげていきたいと思ひます。

本校では、11～2月にも教科ごとに、後期公開授業を開催し、広く皆様方に参観していただけますよう広報しております。本校内の研究で留まらず、他校の先生方や地域の方々とも教育実践について語り合い、学びをつなげていける、そんな学校であり続けたいと思ひます。ぜひ今後とも御指導、御支援を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

教職専門性開発コース2年 月澤 光恵

2013年6月7日(金)、第48回福井大学附属中学校の研究集会に参加させていただきました。今回の参観では、生徒たちの発言の多さに驚きを覚え、活発に活動に参加している姿を見ることが出来ました。ここでは、私の印象に残った授業での子どもたちの様子と、合唱練習の様子についての2点を書いていきたいと思ひます。

まず印象に残ったことは、グループワークについてです。今回見せて頂いた1年生の授業のグループワークでは、生徒たちの教えあっている姿を見ることが出来ました。特に私の見せてもらっていた班の生徒の行動力と優しさが印象的でした。最初にリーダーとして班員に指示をしていた女の子がいたのですが、話し合いが進むにつれて彼女自身も課題が分からなくなってきたのか、自信が無い表情をしていました。指示もできなくなってしまい、私自身も、これでグループワークが成立するのだろうかかと不安

になってしまいました。しかし、私の見せてもらっているグループは、そこからの立て直しが素晴らしいと感じました。驚いたことに、そこからのかじ取りを別の班員が行いはじめました。先ほどまでリーダーをしていた生徒を見捨てるわけではなく、しっかりと説明をして理解してもらおうとしている姿も見えました。初めはリーダーという役割を取られて素直ではなかった生徒も、次第に輪の中に入るようになり、グループは課題を成し遂げることが出来ていました。いざと言うときに生徒が立ち上がることができるような関係もできていたのだろうと感じることが出来ました。

次に印象に残ったことは、合唱練習についてです。お昼休憩中に、生徒の合唱練習の場面を見ることが出来ました。私は、附属中学校練の合唱文化の話を実際に聞いてはいましたが、疑問は浅はかなものでした。練習が時間通りに始まり、生徒たちが歌

*Fukui Round Tables Summer Sessions 2013
For Reflective Practice, Organizational Learning,
and Reflective Institutions
of Teacher Professional Development*

実践し 省察する コミュニティ

Communities of Practice and Reflection since 2001

2013.6.29-30

福井大学総合研究棟V（教育系1号館）ほか

6/29 Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合うコミュニティを培う

日本の教師教育改革のための福井会議2013

富山市立堀川小学校教育研究実践発表会に参加して

鯖江市鳥羽小学校 中道 優子

い出した瞬間に、生徒たちの歌声に鳥肌が立ちました。こんなに大人数で迫力があり、美しい合唱を、私は聞いたことがありませんでした。そして、驚いたことに指示を出しているのは教師ではなく生徒でした。歌い終わった後に指揮者の生徒が、歌い出しについてのアドバイスをしていました。歌っていた生徒たちは、指揮者のアドバイスを理解し、歌を良くしていこうとしていました。私は彼らを見て、彼

ら自身が学校文化を大事にしているのだろうということが伝わってきました。おかげで素晴らしい休憩時間になりました。

生徒のまっすぐに学ぶ姿が、私にはまぶしく思えました。この学びや感動を、少しでも生かしていくことが出来るように、努力していきたいと思いません。

5月31日（金）、6月1日（土）と堀川小学校教育研究実践発表会に参加した。3月のラウンドテーブルで堀川小学校の先生方の熱い実践報告をお聞きし、実践記録を読むだけでなく、どんな授業が行われているのか是非行って自分の目で確かめてみたいと思ったからである。

公開授業は2日間とも4年杉林級の取り組みを見せていただいた。同じクラス・同じ子どもを追うことで、2日間という短い時間ではあったが、子の学びの変容やそこに意図的に働く教師の支援が見え堀川小学校での学びを勉強させていただいた。

理科「電気のはたらき」の授業は、炭電池によってモーターを回すことに成功したTくんの発言で授業が展開されていった。その前の「くらしのたしかめ」の時間では、電気を作るものとして「塩っぱいもの（＝みそ汁など）」「みずみずしいもの（＝フルーツ）」としていただけに、炭が電気を作ることに子どもたちは驚きを表していた。そこでTくんが実際にみんなの前で炭で電気が作れることを見せ、これはふつうの炭では無理なこと、備長炭という特別な炭でしか起こらない現象であることを説明した。授業は終始子どもたちの発言で展開されていく。「電気をつけて肝試しをしたい。」というTくんの強い思い。「肝試しって？」「モチモチの木にきもすけって出てきたよ。」・・・授業展開からそれる子どもたちの発言にも全く動じず、教師は子どもたちの言葉を丁寧に発言者のネームプレートと共に板書していく。時折、「違ったら言ってね」と発言者に断りながら、子どもの発言を要約し板書する。そこには、一人ひとりの子どもの学習に対する熱意を大切にしながら、聴き合い・かかわりあいを通して自らの学習の取り組みを振り返らせ、さらに発展させていこうとする堀川小スタイルがまさに表れていると感じた。

また、聴き合う姿勢がとてもあたたかい。単に体を向けて相手の話を「聞く」のではなく、相手の話を理解しようと身を入れて「聴く」からこそ、自然に仲間から「どうしてそんなことをしようと思いついたの?」「それはどういう意味なの?」という素朴な疑問が生まれていた。Tくんはそれらの質問にひとつひとつ丁寧に答えていく。「炭電池で電気を作るために70回も実験をしたなんて、Tくんってすごいね。」この仲間の素直なつぶやきで、Tくんは自らの学びを仲間に認められた満足感を味わい、さらに発展させていこうとする意欲をもつことができていたようであった。授業の終わりに書いたTくんの感想を読み、学びの原動力を仲間とのかかわりから得られることのすばらしさをつくづく感じた授業であった。

後の研究協議では、子どもたちの誤概念をどう訂正していくのかという話題が提起され、いろいろな意見が交わされた。誤概念は子どもたちが学習する以前からもっている素朴な概念であり、学びのあらゆる場面の中で誤概念を訂正していくプロセスを保証していくこと、追認できる場を常に与えることが大切であるという意見にはっとさせられた。私は今まで、子どもたちのもつ誤概念を訂正していくための時間や場を十分に確保していただろうか。ただ単に科学的に正しいとされている概念をすぐに提示し、矯正しようと試みていただけではなかっただろうか。概念は子どもたち自身が作り出すものであり、新しい概念に更新していく過程を大切にしなければならないと、今までの自分を振り返り反省した。

重く充実した研究会であった。子どもたちの生き生きした様子や、先生方の熱心な姿勢に感動し、今までの自分を振り返り、またこれからできること・すべきことを考えさせられた2日間であった。



Zone A 学校 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

昨年度のラウンドテーブルに引き続き、テーマ「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」を前提として、今回は「協働を創り出す」という目的を明確にしたネーミングを設定しました。これからの時代を担う子どもたちの豊かな学びを支えていくためには、学校だけでなく家庭そして地域がそれぞれの役割を自覚し、連携・協力しながら、まさに協働を創り出して子どもたちの教育を支援していく必要があります。学校を開いて連携したり協力したりするだけにとどまらず、協働で子どもたちに関わっていく組織体制ができていくことで、教員どうしのあるいは子どもたちどうしのコミュニティへの意識も変わっていくと考えます。

今回設定した「協働を創り出す」というテーマは、学校を中軸に置きながら、まず学校内での協働をどのように組織化すればよいのか、次に、地域や家庭といった学校の外との協働をどう構築すれば良いのか、さらにはそれらをどう子どもたちのコミュニティにつないでいけば良いのか、という課題に迫ろうとするものです。学校内での協働、外部との連携が原動力となった学校改革の実践事例を手がかりに議論を広げ、深めていきたいと考えています。

■ Session I ポスターセッション 12:50-13:50

福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、学校拠点の協働研究に関するポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

■ Session II シンポジウム 14:00-15:20

①福井県教育庁生涯学習・文化財課 道関 直哉先生の報告

勝山北部中学校では、NIE（新聞を使った学習）やESD（持続発展教育）に関する取り組みを通して、教師、生徒、そして地域が協働組織を創りだしています。その構築の経験を活かし、学校の組織化、協働のプロセスのノウハウや、持続可能な体制づくりへの課題について語っていただきます。

②宮城県気仙沼市教育委員会副参与 及川 幸彦先生の報告

気仙沼市は、市内の全学校がユネスコスクールとして登録され、市を挙げてESDを推進しています。持続可能な社会づくりのために、学校が、宮城教育大学、地元のNPO法人、企業などとのコラボを通して活発な活動を行っています。学校と外部が創り出す本気の協働のプロセスや、その協働が震災によってどのように機能したのか、について語っていただきます。

【コーディネーター】 国立教育政策研究所 総括研究官 五島 政一

ESD、環境教育、地域教育、防災教育などに造詣が深い五島氏に、今後の教育の展望から、それぞれの取り組みについて、意義付けを行っていただきます。

■ Session III フォーラム 15:30-17:40

先の2つのsessionを受け、協働による学校改革に挑戦している福井県内外の小学校・中学校・高校・教育委員会・特別支援教育センターから協働を創り出す具体的な報告をしていただきます。クロス・フォーラムを設けて各自の挑戦を傾聴し、議論し、共有していきます。